

人生100年 健やかに生きる

「体育・スポーツとともに」

③

NPO法人 ならスポーツクラブ理事長

北 良夫 (90)

1896(明治29)年に近代オリンピックが始まり、20年後に米・ロサンゼルスで開催された第10回オリンピックでは、陸上、水泳を中心に日本選手は大活躍、好成績を残している。

三段跳びの南部忠平選手は、世界新記録で金メダル、「暁の超特急」と呼ばれた吉岡隆徳選手の100メートル6位入賞は、90年経った今もいまだ並ぶ人はいない。この年に生まれた私には、当時の日本のスポーツは記述以外に知る由(よし)もない。物心のついた頃、日本は「戦争への道」を走り出していた。小学校には年老いた先生が残り、今様の体育・スポーツを学ぶ環境など全くなかった。

スポーツとの出逢い

即席砂場で倒立、宙返り

小学校4年生の時、師範学校で学ぶ先生の卵が、教育実習にやってきました。放課後になると、運動場の片隅を掘り起こして砂場をつくり、倒立や前方宙返りなどを教えていただいた。これがとても

終わると、ボールもバットも使わせてもらえず(これは全国共通の約束事?)、もっぱらランニングや球技の遊びで冬季を過ごした。1950年、野球部のメンバーが、広島で開催された全国高校ハン

な出来事でもそれを繰り返すこと。幼児の時に幼稚園の先生が、みんなに1本の縄を渡し、「跳んでいると縄の中央がすり減っていく。一生懸命にやる人の縄は切れる、その代わり必ず跳べるように

新鮮で子供心に「将来は、先生になりたい」と目を輝かせた。

戦後、憧れていた教員を目指して師範学校に進学、誘われて野球部に入学した。「新制

中学野球ばかりがうまくなり」と揶揄(やゆ)する川柳が読まれるほどに、野球は戦後の憧れのスポーツであった。当時は夏の大会が

ドボール大会に、県代表で出場したといっても信用してもらえない。こんな時代の体験がスポーツ人生を歩むきっかけになっている。

バイオリンストとして有名な千住真理子さんが、母校の機関誌に寄稿した文章がある。何かができるようになるきっかけは、ささい

な」と。バイオリンを学ぶようになって、難しいところがうまくこなせないで苦しむ度に、縄跳びを思い出して頑張った。ごく小さな身近な出来事から、努力すれば夢は必ず実現する、この大切なことを1本の縄から学んだと…。

新しい年を迎えた1月の末、県が開催した

二つのイベントに参加した。一つは、8年後に奈良で迎える国民スポーツ大会に向けてのセミナー、もう一つは今話題の学校部活の地域移行を踏まえて、活動する地域スポーツクラブの現状報告会。いずれもこれからの県民スポーツを、どのように発展させるのかを考

える催しであった。人生100年を健康に過ごすために、スポーツは欠かせない文化である。8年後に迎える40年振りの「国民スポーツ大会」は、すべての県民がスポーツに関われる千載一遇の機会である。

第2、4金曜日掲載予定



1950年、広島で開催された全国高校ハンドボール大会に県代表として出場した。写真は入場行進の模様